

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 1日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520264

研究課題名（和文）

英国歴史小説の歴史化—啓蒙・ロマン主義時代の交渉とポストモダンの応答をふまえて

研究課題名（英文）

Historicizing the British Historical Fiction in the Romantic Period: between the Enlightenment Negotiation and the Postmodern Responses

研究代表者

松井 優子 (MATSUI YUKO)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：70265445

研究成果の概要（和文）：ロマン主義時代の歴史小説を代表するウォルター・スコットの作品を中心に、ナショナル・テイルをはじめとする同時代の隣接ジャンルとの交渉や、ポストモダン歴史小説による応答や手法をふまえ、歴史的視座の導入による包括的な社会的視点の維持・拡大や、パラテキストや複数の語り手を通じた複眼的な歴史叙述の試みなど、この時代の歴史小説の英国小説史や歴史小説史への新たな組み入れの意義について、具体的な作品分析を通して検証した。

研究成果の概要（英文）：This study demonstrates the necessity and the appropriateness of integrating the British Romantic historical fiction, especially the works of Walter Scott, with the established canon of nineteenth-century novels. This integration is managed through the comparative reading of contemporary novelistic genres such as national tales and the analysis of the comprehensive social viewpoint of Scott and others, which anticipates Victorian social novels. This study also explores Scott's innovative and sophisticated narrative technique in presenting multi-layered historical perspectives and offers a comparative view of his technique with more recent postmodern historical novels that seem to be a response to Scott. By making these observations and comparisons, the study updates Scott's position as a major figure both in the history of British novels and in the development of historical fiction as a distinct literary genre.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：英文学、文学論、西洋史

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初の背景として、近年の歴

史小説の流行とこれにともなう歴史小説批評の進展、およびロマン主義時代の小説の多様性を回復する動きが一定の成果を生み、そのなかで特にウォルター・スコット (Walter Scott, 1771-1832) とその作品の再評価が活発化してきた事実が挙げられる。

20世紀後半から21世紀にかけて出版された、アラスター・グレイ (Alasdair Gray, 1934-) による『哀れなるものたち』 (*Poor Things*, 1992) 等のポストモダン歴史小説は、歴史小説がたんに過去の事件の再現や冒険的性格をもつのみならず、過去と現在との関係性や歴史叙述の方法や可能性を問うジャンルであることを再認識させた。同時に、パラテキストの役割を含めた小説技法の分析を中心に、このジャンルに関する批評も洗練の度を高めてきた。それらが提供する洞察は、歴史小説が一大ジャンルとして成立したロマン主義時代の作品を再検討し、両者の関係を考察する意義につながっていく。

また、ロマン主義時代の小説をめぐっても、この時代の小説作品の数やジャンルの多様性を回復する作業が着実に進行してきた。なかでもスコットランドやアイルランドを扱った作品の分析を中心とした種々の研究成果が蓄積されるにともなって、この時代の小説をめぐるとの状況に対する従来の認識は大きく変容を遂げてきている。後代の批評によって正典化され、批評の対象とされてきた作品だけでなく、実際に出版され読まれていた多様な作品群の存在やそれらの間のダイナミズムがますます意識されるにつれて、多くの出版物や学会でのセッションにおいて、当時の文学界において中心的な位置を占めていたスコットとその作品を同時代との文脈で論議し、その前後の時代と接続する必要性が示唆されてきている。

2. 研究の目的

本研究は、上述の二点における研究の進展を基盤としつつ、ロマン主義時代の英国歴史小説を代表するウォルター・スコットの作品の同時代性や、その過去と現在との関係性の構築のありようを考察し、英国小説の展開を理解する新たな視座の導入に貢献することをめざしている。なかでも、先駆的「歴史小説」やナショナル・テイルなど隣接ジャンルとの関係性、パラテキストの役割を含めた語りの形式や作品内での読者と「小説家」との交流など複数の交渉のありようを軸に分析を進め、興隆期からヴィクトリア時代にいたる英国小説の展開においてそのジャンルの特性ゆえに果たしえた発展的役割を検証する。こうして、歴史小説の同時代性という論点を通じてのより広い文脈におけるロマン主義時代文学研究の射程の拡大とともに、従来の英国小説・文化史の接続かつ再編制に資

することを目的としている。

3. 研究の方法

大きく分けて、隣接ジャンルとの関係性、スコットの主要作品の歴史叙述をめぐる手法の分析という二つの観点からのアプローチをとりながら、英国小説・文化史における歴史小説の発展的役割をめぐる検討を進めた。啓蒙・ロマン主義時代の作品や資料については、特にスコットの歴史小説の先駆的作品とみなされうる歴史書や歴史的事件を扱った小説作品の特定という基礎的作業から始めることが必要であり、スコットランド国立図書館を中心に資料を調査、収集し、整理した。

これに引き続き、隣接ジャンルであるナショナル・テイルやスコットの長篇詩との関係性の分析では、国内の関連の研究会にて当該の他分野の研究者とのあいだで議論を検証し、学会のシンポジウムにて発表するかたちをとった。また、スコットの歴史小説におけるパラテキストの性格や読者との関係については、ポストモダン歴史小説との比較検討をしたうえで、主要作品についての考察を進め、それらをスコットの国際学会で発表するとともに、関連のセッションやワークショップに参加し、スコット研究者と幅広く意見交換をおこなって、論の妥当性や研究の方向性の確認に努めた。

4. 研究成果

(1) ナショナル・テイルという隣接ジャンルや先駆的作品、同時代の小説については、2010年9月にスコットランド国立図書館にて文献調査を実施し、関連資料の収集や分析をおこなった。

19世紀初頭に著されたアイルランドのナショナル・テイル、なかでもマライア・エッジワース (Maria Edgeworth, 1776-1849) の作品は、スコット自身が先駆的作品として言及している。これらに加え、スコットランドでもこれに類する作品が出版されていたが、なかでもクリスチャン・イズベル・ジョンストン (Christian Isobel Johnstone, 1781-1857) は作品にナショナル・テイルの副題を冠するほか、アイルランドの実情にも通じた作家だった。このジョンストンの『サクソン人とゲール人』 (*The Saxon and the Gael*, 1814)、『クラン・アルビン』 (*Clan-Albin*, 1815)、および『エリザベス・ド・ブルース』 (*Elizabeth de Bruce*, 1827) は、この時代のナショナル・テイルというジャンルのとった歷程の一典型を体現すると同時に、歴史小説との接点と分岐をともに示唆しており、スコット作品との比較においても有効である。

その初期の特徴として挙げられるのは、特定の地域の細かく具体的な、あるいは民俗学

的な習俗描写はもちろん、そうした描写が幅広い社会階層を網羅し、一個の社会的全体像の提示が試みられていること、また、その関心が当該地域のみにとどまらず、むしろそれらをより大きな地理的・政治的空間の一部として提示していく俯瞰的なパースペクティブの存在である。その点でナショナル・テイルというジャンルは、その名称がときに連想させるような局所的な視点の産物ではなく、連合王国の首都ロンドンとブリテンの植民地との中間という見通しのきく地点から複数のネイションを同時に視野に収め、その文化的差異を焦点化すると同時に、それらとともに包摂しうる空間の構造化やその拡大の表象を試みる、すぐれて野心的なジャンルと考えるべきだろう。

ジョンストンの場合、初期の二作品では上記の特徴が顕著に表れており、各地域やネイション間の比較や親縁性の指摘によって拡大する空間のダイナミズムを伝えつつ、それらの文化的な布置が図られている。その一方、ナショナル・テイル末期の試みと位置づけるべき『エリザベス・ド・ブルース』においては、連合王国外に広がっていた従来の視座の縮小やこれに依拠していたプロットの弱体化、人物や習俗描写のナショナルな固定化がみられるとともに、代わってジョンストンの他の著作においては、ブリテン国内における階級間の差異の問題が各ネイションの表象と連動するかたちで浮上してくるのが観察できる。

スコットの歴史小説も、これらナショナル・テイル同様、複数の地域やそれらを包摂する一個の共同体の全体像の提示を試みている点で、その関心や技法を踏襲ないし共有している。ただ、ジョンストンが徐々にその視点を連合王国内における同時代の階級間の問題に移行、収斂させていくのに比べ、スコットの場合は歴史的時間を遡行することで、ブリテン外に広がる複数の地域間の交渉と包摂という論点を維持しつつ、それをさらに過去と現在の共同体間の交渉の問題に重ね合わせる手法を一層洗練させていく。過去を舞台とすることは当時のゴシック・ロマンス等にも数多くみられたが、スコット作品の場合、ゴシック・ロマンス的な要素に加えて史実や歴史の人物を作品内に取り込み、その重要な関心の一部とすることで、現在の現実との回路を補強している。過去と現在を分節化し、かつ接続するスコットのこの手法は、すでに彼の長篇詩における土地や風景の描写にもみられたが、特に代表作『アイヴァンホウ』(Ivanhoe, 1819) 冒頭の一節に典型的に示されていると言えるだろう。

このように、先行作品群における関心にさらに歴史的視座からの広がりや重層性を賦与することで、スコット作品は全体として、

ナショナル・テイルをふくむ他の作品や現在の現実をも収めうる時空間を形成し、一個の参照点として機能することが可能となったと考えられる。それは、同時代の小説がスコット作品に直接言及し、その時空間の一部となる身ぶりを示していることにもあらわれている。スコットの歴史小説が確立した包括的な視点はその後のヴィクトリア時代の社会的小説においても観察される一方で、この時代における参照点としてのスコット作品の受容の実態についてはさらに検証を進める必要があると思われる。

(2) 作品内に史実や歴史上の人物を取り込むという上述の手法はスコット作品を歴史小説たらしめているゆえんであると同時に、過去と現在の関係性や歴史叙述の可能性という論点を必然的に招来することになる。のちのポストモダン歴史小説の関心や手法がスコット作品と最も効果的に相互に照射し合うのも、この点においてである。

アラスター・グレイの『哀れなるものたち』、アンドルー・クルミー (Andrew Crumey, 1961-) の『ミスター・ミー』(Mr Mee, 2000)、ジェームズ・ロバートソン (James Robertson, 1958-) の『ジョゼフ・ナイト』(Joseph Knight, 2003) では、グレイが19世紀と20世紀のグラスゴウ、クルミーが20世紀のセントアンドルーズと18世紀フランス、19世紀スコットランド、ロバートソンが18世紀と19世紀のスコットランドと西インドを舞台とし、それぞれ序や註といったパラテキスト、複数の語り手の存在、あるいは二つの時代を往還する語り等の工夫を用いて、過去と現在との相互関係を問い、テキストとしての歴史や歴史解釈の相対性・不安定性を担保する複眼的な歴史の語りを演じている。

これらの作品がいずれもスコットの歴史小説への応答という性格をもつことをみずから示唆しているのに対し、これらポストモダンの歴史小説をめぐる批評がスコット作品に立ちかえってその手法を問うことは、従来ほとんど試みられてこなかった。確かに、ポストモダンの洞察を19世紀前半の小説に読み込むアナクロニズムは厳に避けなければならない。けれども、これらの作品とスコット作品の手法とを相互に参照することで、現代の読者が、スコット作品が「発見された草稿」という仕掛けや口承の伝統を連想させる語り手を先行作品から受け継ぎながらも、それらを複数の歴史的語り手法へと発展させ、複眼的な歴史叙述を試みていることを読みとることは十分に可能であり、むしろ必要なことだと思われる。

こうした視点は、たとえば『ミドロージャンの心臓』(The Heart of Mid-Lothian, 1818) について、従来軽視されてきた序や複数の語

りに注目することで、この作品の欠点として批判されてきたエピソードを読み直し、作品全体のテーマを再検討することにつながる。これまでのように序や後書きを本篇と切り離して読むかわりに、本篇と関係づけられ、その読解を方向づける作品の重要な一部として分析すると、この小説の二人の語り手のうち、一人は過去と現在を相互に参照させる視座を提供し、もう一人はこのメインの語り手が語る物語を別の視点で読み直す契機を提供し、それを読み手に強く促していると考えられるからである。また、序や序章が示唆するこの小説の複数のジャンルに即して分析すると、多くの批評家たちが欠点と批判してきた最終巻や副次的登場人物はプロットに不可欠の存在であるとみなすことができるばかりでなく、その立場から作品を読み返せば、他の登場人物のこれまでとは別の側面が明らかになる。そして、それはじつは当時の移民や植民地貿易に関する歴史的事実に裏付けられた、この作品のもうひとつの隠れた物語であり、それが序で最初から示唆され、本篇の各所にこれを連想させ支持する語が置かれていたことも明確になる。さらに、この隠れた物語こそが、当時の書評の一本における一見場違いな言葉遣いを呼び出した要素であり、この小説は一個の歴史的事件を題材としているだけでなく、歴史叙述の相対性をも問うており、従来の批評で批判されてきた箇所はむしろ複数の読みや歴史的解释を促す役割を果たしていると思われる。

『ミドロージャンの心臓』と語り手を共有する『供養老人』(Old Mortality, 1817)は、今度は墓地や墓碑銘を枠物語に取り入れており、スコットが18世紀的モチーフを歴史の語り活用に活用、転用した一例と考えられる。このように、20世紀後半以降の歴史小説による応答はスコット作品の再読を促し、それらの歴史叙述への態度や手法を参照することで、スコット作品のパラテキストが先行作品での実践を継承しつつも、そこに歴史叙述のモードや相対性の確保という機能が付加されていることが明らかになる。そこには、後代の作品がスコット作品の革新性を照らし出すというダイナミックな関係がみられるようである。ただ、『ミドロージャンの心臓』や『供養老人』と語り手を共有している他の作品や、それだけで独自の世界を構築していると思われるこれら各作品の序や後書きの相互関係については、今後も検討の余地が残されている。

(3) スコットによる小説第一作『ウェイヴァリー』(Waverley, 1814)も、先行作品の継承と差異化、ポストモダン歴史小説が試みている複眼的な歴史叙述や解釈の不安定

性と関連する語り手や語りの構造など、上で述べてきた論点からの分析が有効な作品である。さらに、この作品に題材を提供している1745年ジャコバイト蜂起をめぐる近年の歴史学の分野における研究の発展も、この歴史小説の読解に新たな洞察を提供している。

この作品と比較可能な先行作品や言説としては、この作品に登場するハイランド兵やハイランド地方を扱った当時の小説、ジャコバイト蜂起をめぐる記録、およびジャコバイト蜂起やイングランドの内乱を扱った小説が挙げられる。まず、アン・ラドクリフ(Ann Radcliffe, 1764-1823)、エリザベス・ヘルム(Elizabeth Helme, 1772-1814?)、メアリ・ジョンストン(Mary Johnston)らによるハイランド関連の同時代の作品との比較では、これらが中世ないし19世紀初頭を時代設定にとっているのにはたいし、『ウェイヴァリー』の場合はそのいずれでもない、18世紀半ばの内乱を題材としている点で際立っている。この点だけでも確かに当時の読者にとって新奇さを与えたと推測できるが、近年の歴史学分野での研究が指摘しているように、1745年蜂起は現代にいたるまで複数の解釈がときに感情的な反応を喚起する一大事件であり、これを題材とした語りにはおのずから異なる特徴が観察できると思われる。

一方、ジャコバイト蜂起関連の同時代の記録である『アスカニオス』(Ascanius, or, The Young Adventurer, 1746)、『放浪者』(Wanderer, 1747)、『アレクシス』(Alexis, the Young Adventurer, 1746)などの代表的文献はそれぞれ蜂起の指導者をアレゴリカルな名称で示し、それに沿って物語が構成されているという点でフィクション性を感じさせる。なかでも、鍵小説に分類される『アレクシス』は、このジャンルと歴史小説との一つの交錯点を示しているようである。ただ、これらは蜂起の指導者の蜂起後の動向に焦点を当てているのに対し、『ウェイヴァリー』はそれ以外の人物を主人公とし、またその人物の蜂起以前から蜂起後までの経緯を追っている点で、これらの先行的な記録作品とは異なる関心を示している。また、ヘンリー・フィールディング(Henry Fielding, 1707-54)の『トム・ジョウズ』(Tom Jones, 1749)は1745年蜂起との関連で、ジェイン・ウエスト(Jane West, 1758-1852)の『王党派』(The Loyalists, 1812)は歴史的内乱を扱っているという点で『ウェイヴァリー』と比較可能であり、スコットは特に『ウェイヴァリー』の序盤においては、この二作品における語りとの類比に読み手の注意を引いているようである。

とはいえ、『ウェイヴァリー』での語りは、これらとは異なる特徴も数多く示している。その一つが、枠物語とそこで示唆される語り

手の身体性である。最終章での語り手は小説家、歴史家、自伝作家という三つの声を備えており、それぞれ異なる機能をもってこの歴史小説の語りにも寄与している。小説家の声は、この作品をあくまでも小説という文学形式に位置づけるとともに、そのなかでの新たなジャンルの創出を告げ、歴史家の声はそれを側面から支持すれば、自伝作家の声は、後書きが序を呼び出し、再読という行為を作品内に構造化して、作品で語られた歴史的事件をめぐる解釈の回顧性・不安定性や更新の可能性の確保に貢献している。さらに、この語り手は、序や後書きで作品の意味の具体化に能動的に参与する読者モデルを提示し、これを奨励する役割も果たすほか、本篇における語りもこの読者モデルを前提に進行し、読者を作品の「登場人物」の一人に位置づけていく。こうして、過去の内乱の記憶を取り込んだ一個の読み手の共同体がそこに創出される。さらに、重層的な語り手とその声は作品の時間構成の重層性につながり、それは、歴史的事件を題材としたこの作品に寓話性を賦与していく。

『ウェイヴァリー』をはじめとするスコットの作品は従来、歴史小説というジャンルを確立したとされる一方で、ロマン主義時代の研究においては、近年ではそれ以前にも歴史小説が存在したとしてその革新性が否定されたり、歴史小説研究においては、ポストモダン的な歴史小説が多く出版されるなかで、旧来ないし旧型の歴史小説の代表として批判的に言及されることも多かった。けれども、以上のように、同時代の文脈でスコット作品そのものを再検討すると、それが現代の歴史小説の手法にも通じる革新性を確かに備え、ロマン主義時代の小説に一つの画期や参照点を提供していたことが再認識される。この作品が小説読者のモデルを提示し、一個の読み手の共同体の構築にも関わっていることとあわせ、この認識は従来とは異なる小説の発展史を構想することにもつながると思われる。こうした視点に立ったスコット作品の再読は今後も重要な課題だが、先述のように、そこでは現代の歴史小説をめぐる諸事情との差異に十分な注意を払った批評姿勢が要求されることを常に念頭に置く必要がある。

(4) 上のような分析の過程で重要な論点として浮上してきたのが、読み手が果たした多岐にわたる役割や派生作品を含め、19世紀におけるスコット作品の受容の多様性である。スコット作品は同時代の多くの詩や小説のなかで言及され、読み手のネットワーク化に寄与していたと思われるが、それだけでなく、『ミドロージャンの心臓』の場合、種々のチャップブック版や複数の舞台化の翻案およびその出版という形態でも流通してい

た。いずれも原作とは大幅に異なる解釈を提示しつつ、多様な読者層に対応する試み、あるいはむしろ読者層を多様化する試みととらえることができる。

やはり19世紀に多くみられた、スコット作品から派生し、これを補完する画集や肖像画集の出版も、別の点で注目に値する。これらの多くは作品からの抜粋とともに、作中の場面を視覚化することで、作品全般のもつ特徴を逆照射する結果になっているからである。テキストに添えられた絵、または絵に添えられたテキストは、スコットの歴史小説と人物や背景描写における写実性の問題にあらためて注意を促す。同時代を扱った小説にも増して、歴史小説では過去の習俗を詳述することは読み手に対する重要な情報の伝達であると同時に、作品世界の構築と直接的につながっており、スコット作品におけるこれらの描写の手法や実践が19世紀の写実小説と接続する可能性を示唆している。スコット作品が提供する包括的な社会的視点についてはすでにふれたが、この点でもスコットの歴史小説と19世紀に主流とされる小説形式との重なりが指摘できるだろう。上で言及したものを含め、19世紀における派生作品はきわめて多岐にわたっており、その数も膨大だが、かたわら20世紀においてはその種類も数も激減する。こうした事実は、今度は19世紀から20世紀にかけての小説の展開を検討するうえでも、異なる媒体がスコット受容や原作の解釈に果たした正負両方の役割の分析に潜在的意義が存することを示していると思われる。

(5) 以上、ロマン主義時代の歴史小説を代表するウォルター・スコットの作品は、ナショナル・テイルをはじめとする同時代の小説、ジャコバイト蜂起をめぐる記録作品や内乱を扱った小説といった隣接領域との交渉のうえで、歴史的視座を加えた包括的、社会的視点や写実的描写、歴史叙述や解釈の不安定性や相対性を確保する作品構造や語りの形式を構築・実践し、19世紀における小説の展開に一つの画期や参照点を提供していることが個々の作品を比較・検討することでうかがえる。特に歴史叙述をめぐる特徴の分析については、のちのポストモダン的な歴史小説による応答をふまえた再読の有効性も顕著にみられる。このように、これまで、過去を扱ったジャンルであるがゆえに19世紀英国小説・文化史において位置づけが困難だったり、あるいは、スコットを批判的の原点とみなすことが前提とされてきたがゆえに、歴史小説批評においてむしろ現代の作品との接続があまりなされえなかったスコット作品を、同時代の小説史や歴史小説史のなかで理解する意義と可能性について一定の検証が

得られたと思われるが、数多いスコット作品の他の作品や作品相互の関係については、まだ具体的な分析の必要が大いに残っている。加えて、特に今後の検討課題としては、19世紀におけるスコット作品の受容の程度や多様性と、それによって果たし得た、より大きな文化的役割の考察が挙げられる。これは続く19世紀から20世紀にかけての英国小説・文化史の展開を理解する視点の一つにもなりうると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 松井優子、「風景・詩情・スコットランド」、『第84回大会 Proceedings』、日本英文学会、査読無、2012年、79-80。
- ② 松井優子、「第九回国際スコット会議報告」、『ジェイン・オースティン研究』、査読有、第6号、2012年、46-52。
- ③ MATSUI Yuko, 'The Transnational Exchange of National Tales: C. I. Johnstone's Irish Connections and the Location of Gaelic Culture', *Journal of Irish Studies*, 査読有、24巻、2011、7-23。

[学会発表] (計7件)

- ① 松井優子、「ロマン主義時代歴史小説の射程——ウォルター・スコットを中心に」、青山英文学会、2012年12月8日、青山学院大学。
- ② 松井優子、「『ウェイヴァリー』における語り——歴史小説と読者をめぐって」、青山英語英文学研究会、2012年11月7日、青山学院大学。
- ③ MATSUI Yuko, 'Narrating with or without a Body: the Textual and Corporeal Construction of the Author Figure in *Waverley*', *Corporalite et spiritualite dans l'oeuvre de Sir Walter Scott: Colloque Scott*, 2012年7月6日、パリ第四(ソルボンヌ)大学(フランス共和国)。
- ④ 松井優子、「風景・詩情・スコットランド——聴き手が書き手になるとき」、日本英文学会全国大会、2012年5月26日、専修大学。
- ⑤ 松井優子、「第九回国際スコット会議報告」、日本オースティン協会、2011年12月7日、青山学院大学。
- ⑥ MATSUI Yuko, 'Scott's *The Heart of Mid-Lothian* as a Story of an "Outlaw" Missing Child', *The Ninth International Scott Conference*, 2011年7月7日、ワイオミング大学(アメリカ合衆国)。
- ⑦ MATSUI Yuko, 'Locating Gaelic Culture

in *British Fictions of History and Geography by Walter Scott and C. I. Johnstone*, IASIL Japan 全国大会、2010年10月9日、東京大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井優子 (MATSUI YUKO)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：70265445